

回憶漫談其二

道達先生稿



特別
文庫14
A157
2



53-1702(B)



田憶漫談 其二

はるる

私が道新草紙の事に
謝儀を打ちあげた頃

の事を話すと

順神とて名義の上流が
刺陽に入ると

めのはいつか調て見るに
清之形跡を

記にたの如き事がある
それは明治十一年

松千代田神佐世園十郎、
大岡次、仲

我、羊何よりが新編下流
事を録した條

下の話記である。

其辭意(何事)

166 田憶漫談

No. /

一にて、頭がハ物髪の棒茶前筆を紫の糸に
 て結びたるのみ、在來の芝居の癖と
 は全く一変し、三幕目に築山御前が本身
 の雑刀を用ひ、水がめぢんまがある家
 康は折烏帽子に薄き福色の素袍三つ葵の
 紋附にて金剛草履を穿き、夢の醒めたる
 場にてお召茶の縮緬に葵の紋の羽折、仙
 臺平の袴といふことし、大詰聚樂湯敷
 は黒の袍に薄顔の冠をいひき、秀吉よ
 り太刀を拜領する件も矢張り松岡氏に故

實を質して、血習の侍が膝行する事にな
 した。此服装、種、すべて従前の芝居
 に於て見ることは能はざる。新式をいふ、煙
 に巻ぬる感歎する。あつたか、大部分
 は急進の改革を絶對に否認し、此場の近
 習が膝行して市前へ進むを見て「草場こ
 ろく」をいふ冷罵を加へても、其一つあるあ
 りき。此時舞臺内外に花瓦斯を點す。
 明治九年の秋にありして、開成學校の豫備
 門に入學し、翌十年にあらはれ、初めて東京の遠劇

併し第一期は歴で、最も多く一部の新好別家
 王嘉せめは十七年十一月の新富社の申幕
 紅紫時平家世盛の重盛諫言であつた。是れ
 程の重盛は本物の重盛以外には又と無かつた
 とまで讚美された。しが本郷の富研軒十八
 番地に住んでゐる十八九軍頃の狩野芳村家が小

10 徳島県 源

No.

8

三下

中幕の盛綱は在来の綿の社下でなく、
 初のが烏帽子に鎧姿、註進の受けには鎧
 下、雪隠の場は、道具を揃へて、馬あま
 ちの上段の間とすし、揃つて華美なる類
 夷陽節黄地に金糸の縫紋ある麻の社下
 十四年十月の春本座の上段である。

10 徳島県 源

No.

8

の寫實的提供

科白本位の別を存し上げようと思ふをうてあ
つた。 ~~此~~ ^此時意は第一期活歴の急先鋒と

No. 18

下 其意書中に、在來の劇場にては到底改良の目
的と途を見込みおけぬ、根本的に新式なる一劇場
を建築せしむと前提し、そのときは、時に李純の西洋
俳優にも其技を借せり、又歌唱會、音楽會等をも
も備せしと主張せり、劇場の修飾の粗費、
時間の冗長、劇場出入の雑雅等を難しあり
寫実主義を唱へて、口を極めて旧劇を又旧劇
ぬきの新劇劇通を罵倒し、衣道廢止論などを

1026 徳島県立図書館

No. 19

16

高調そのは、或は此の感銘が無意識の間
に醸成したる反動ではなかつたかと思ふ。

其頃の初稿は新報を見よ、下の如き記事がある

ある十九日(十九年十月)築地の大椿樓に於
て依田百川先生の新作「吉野梅屋」の上演と
しよ改良狂言の本議がありて、會主末松
謙造先生を始め會員諸氏市川團十郎七席
に列入り伊藤、山縣兩伯爵の夫人、松方、
伊藤の令嬢、其外貴夫人、貴顕、紳士も
來會ありて、作者依田君と川尻君がはる
に正本を讀上げられし其脚色は………伊

No. 19

16
二字
ハリ

科自本位の別を存し上げようと望むを以てあ
つた。 ~~此~~ ~~時~~ ~~意~~ は第一期活歴の急先鋒と
して活動してゐる伊田孝海君が其内助者川
原望岩二氏合作の「吉野拾遺名歌集」が此改良
會の録考に懸つて、おれく生ぬのい作れとし
て空しく落第させられてしまふ。 依田翁を以
て「瓜より其水」とは違つて、次第に失意に
陥らぬため。 翁が其末身に、極端な活歴式
寫實主義を唱へて、口を極めて旧制を又旧制
ぬきの新制別通を罵倒し、衣道廢止論などを

高調そのは、或は此 ~~時~~ ~~意~~ の感銘が無意識の間
に ~~時~~ ~~意~~ 的なる反動ではなかつたかと思ふ。

其頃の初稿は新報を見よ、下の如き記事がある

ある十九日(十九年十月)築地の大椿樓に於
て依田百川先生の新作「吉野拾遺名歌集」と
いふ改良狂言の本讀があり、會主末松
謙澄先生を始め會員諸氏市川團十郎七席
に列入り伊藤、山縣兩伯爵の夫人、松方、
伊藤の令嬢、其外貴夫人、貴顕、紳士も
來會ありて、作者依田君と川原君がはる
に正本を讀上げられし其脚色は………伊

石白曾は會員諸氏に向て、演劇改良力

1020 相馬區

過手あるは猶及ばざるが如く、
と企望すと誘うれしか。……劇場新築は

木挽河邊の鐵道に接近せし場所には、定

まりし由。

如何に一部の改良論が熱激的であつたか、
つて察せられる。また櫻痴居士と立作者に聘し、建

築せられた第一期の由來も同く、
跡跡けり、此のわけである。

跡跡けり、此のわけである。

No.

ア

吉野松遺は、平叙式の史劇で、今日の目で見

れば平々凡々の作だが、當時としては、
色がある。

色がある。また第一期歴史の
の——代表作たる適するものであつた。
多分根

本の立案並びに脚色は、
たてあつたが、主人公たる楠正行、同正儀、

侍、伊賀局などの性格及び其セリは、
田氏の努力が、
見えて

田氏の努力が、
見えて

1020 相馬區

改訂

だが舞臺に上されたるは、其中果してあり
 たるは、前者の文壇勤進帳は、代自が清い
 だが、その狂言作者の手で、大子改作を上下
 ありたる。要するに二氏とも、其作も皆く
 はちあつたが、其勝を奪われぬ終つた。
 依田氏の作に於ては、第一期早稲田文學
 が、數々の厚つて評するものから、珍照されたる。
 清洲改良會に對しては、それが餘り急進主義
 であり、此著者の一派の理共に偏つたものであつたか
 が、發行策として、常に上流に接近せんことを

No. 22

ざして、早稲田、勤進、を目的とした作であつたが、これに
 大勝作はの

ぬ守田勤進は、鮮やかな感を持つてゐたか
 らしい。固い前、の有識故実主義の苦鳴
 たるは、はちあつたが、南之郎は拘束、を可余
 此會の正會員で、今尚生存してゐるは、
 指を履するに堪へぬほどである。流澤、徳積
 陳寅、矢野文雄も、知らるるものか、思は
 の人達、賢さな、事、は、今、是、め、
 廿一年になつて、それとは別に、演藝協風
 會と稱するものか、三宅花圃、女史の嚴君田邊

No. 23

1030 徳積

だが舞臺に上されたのは其中果してあつたか
 だが、前者の文壇勤進帳は代自が描いたが
 だが、その狂言作者の手で大子改作を上下
 あつた。要するに二氏とも一其作も皆く
 はちあつたが一其勝を報われぬ終つた。
 依田氏の作に於ては第一期早稲田文學を以て
 が勤進の思つて評するものから終つた。
 清洲改良會に對しては、それが餘り急進主義
 をあり、此著者の一派の理共に偏つたのであつたか
 が、發行策として常に上流に接近せんことを

ざして、この田圃を目的とした作であつたか
 大正時代の

お守田勤進の舞臺感を持つてお守あつた
 らしい。この舞臺も前の有職故実主義の苦鳴
 しお守あつたお守あつたお守あつた
 のお守あつた吉野松屋に對しては、まことに結構な
 お守あつた舞臺が三人のお守あつた演じられるとい
 う意味の舞臺を何人かお守あつた暗に急激の革新は
 まじつたの俳優の場を得た所と評してゐる。
 それがお守あつた此會は舞臺しつとあつた中止と
 なつた廿一年になつて、それとは別に演藝協風
 會と稱するものか、三宅花圃お守あつたの嚴君田邊

10 20 松島 園 舞

大一小を會長に戴いて組織された。これは其
 會名の示す如く、前記改良會(伊豆)のアンビヤスな
 把負主張を持つたものであつた。其の興行者
 も俳優・法籍人もあつた。替り者に如ちつておられた。
 鹿鳴館での其の會には、私も招かれて列席し
 た。記すはあつたが、どうも縁故で結ぶたのか
 は殆ど記憶してゐない。或は、花南君が其慶
 女作「歡喜鳥」の校閲が何かで公けにされた
 後であつたのかから、田邊家の好意に因つて
 あつたか、いや、さうでもない。たゞ

か掛川銀行頭取、故永富謙八兵の紹介に因つ
 てであつた。私は其頃同氏の字頼で其子
 鳥雄吉君(郵船會社重役)や其他の少年學生た
 ちと海研町の宅一預かりで監督をしてゐた。関
 係的であつた。と云ふで、私自身の此會
 の記憶は甚だ朦朧としてゐるが、幸ひ長田秀雄
 君が其「新刊用韻録」の中に此會會式(七月八
 日の事)を簡短ながら要を得て書いてをられ
 るので、借用しよう。

當時の鹿鳴館は朝野の紳士淑女の華や

10 10 海國新聞

場所である。この鹿鳴館を中心とするのが、明治文化史上、並に政治上に有名な所謂鹿鳴館時代である。その時の来賓は、皇族方を始め、学院の貴顕紳士で、妃殿下の御論、令夫人同伴であつた。総員一千餘名に達して、非常な盛會であつた。守田勤弥は此會に對して、やはり反對の意見を持つてゐた。さて、開會は午後一時廿分、番組の通り、花柳師弟の「四季三番」を先づ第一に演じ、終つて休憩、

100 袖馬 羅漢

かな文際場であつた。船來のジャンボの輝く下で、高貴な絨氈踏んで、明治初年の日本人たちが、古めかしい洋装でジャンボの酔ひに任せて、海まで歸り狂つた

のふまゝの尚をの
 わがと時々に鼻の上へ眼鏡をつまんで
 載せ遙かに後の方を見わたり見渡す洋服
 の少嬢子のふまゝの果して何物をか見ん
 として然するか又は何の爲もなく見せ
 びらかすか
 ドキドキする。レジャーを身に用ひて先き
 一通し振りぬりて後遠なるを案内し、
 立食の席へ伴ひゆくある少嬢子の心算
 白

100 柏馬區邊

下三

と、七月の條に鹿鳴館演習の風情として
 次ぎの如き零碎を下らん觀客が鉛筆で書き書きに
 かしてある。餘り些屑を請ふしからんか
 も改めなき。其儘を録て見よ。
 入来る奴のブルも揚々として得色あり
 招待されて官邸に登るといふ趣あり
 藝人の洋装し羽織袴さなる其あるは振
 常に似お紳士然としてこゝろにあらや
 かちもせぬしきんせと行きあひて會釋
 すも見得の如く見せびらかす眞の紳士

100 柏馬區邊

前なるレリーフの椅子の背に倚りかゝり
耳にすりすも着紳士

書肆の青眼鏡馬の靴音最も朗かな

る活版所の主人容貌殿さまに似たる俳優

の少年團地のスマン梅幸の軽卒我を今

日の衆目の目的なりと思ひ入りたるさま

を見せ

と只これだは、^{わけが}備は、もなしか、^{わけが}事案、

比會に對しては、^{わけが}その同感を持つてゐるであらうこの

で、それで印象が薄かつたのであらう。 ^{わけが}生會前

100 袖 函 函 函

に歸つたと思へ、録の印象は ^{わけが}まゝであらう。

此會の備は、此後尚二三冊あらう。 ^{わけが}其見聞の

甚だ漢然とて、特ん録する程下さ ^{わけが}あらう。今

は省いて、故あつて、此會が改造され ^{わけが}日本漢新

協會、^{わけが}た二十二年九月以後の事を ^{わけが}たし

話 ^{わけが}す。

別行 第一の漢新改良會は、^{わけが}刻々録りに急進的の時

世に先んじ過ぎるゝるれ氣味であつたが、^{わけが}第二の漢

新編風會は、^{わけが}録りに妥協的で、^{わけが}二冊三冊と重

なるんつて、^{わけが}ますく俗化をたしてつた。 ^{わけが}甚だ極に

事務委員は 岡倉覚三、岡野碩、大田景則孝、
 高田早苗、下村善右エ門、森田文苑、開直彦
 の諸氏。文藝委員は 岡倉覚三、依田百川、高
 田早苗、坪内雄祐、奥川喜松、山田武吉、美
 由、古河金河弥、山中村信矩、櫻庭与三郎、
 森田文苑、森林方部、謝道彦、楠根正道、鳥
 居悦、尾崎法太郎、石塚、川尻至忠、須藤光
 暉(南の平)、高橋孝子、田中、堀野、
 は花柳徳次郎(黒崎)、若原、若原、其他、溝
 谷、長唄、清元、一中、常盤、
 談師、長唄、清元、一中、常盤、

美をたま

1020 池馬園

No.

32

ト
ト

今更には、演劇革新事業の傍觀者、又は
 連りすの批評家たる。と述べてゐる。私に於
 時、この會の事務委員中に親友や知人が多く居
 たるゆゑ、勸められ、文藝委員中に加はつた。
 會長は 子爵土方久元、副會長は 子爵香川敬三

1020 池馬園

は其廿一年十二月の大演習の久松所千歳に於け
 る。あつた。見ても分かる。それは菊、尤其他の知後
 にあつて演ぜられた。先代新三幕と稱當で、何等季
 常興行と異なり、さう考へた。此俗化である
 其の造を伴つて一面の理由であつた。ちから。池馬園

義で、洗滌主義で、^{洗滌} 點を捨て、第二に其英雄
 列傳、忠臣孝子本位の優美高尚専一主義でな
 い點に於て、第三には、西洋劇に主義がなく、
 飽むる國劇の特長を保存し、^{藝術} 劇の向上を圖す
 と望むる點に於て。
 其演劇式は、^か 茲の紅葉館を例にせよ。私が
 園菊丸や今の柳屋門の漏れを演じて見せし
 は、此時が初めであらう。其代目の卒直が、
 は、其散會の場、^會 園菊丸の車に在りて
 集りしとある。

李時 氣

1020 柏馬園

No.

34

典等の侍者。又、^習 高の妻、^{間野秀俊} 間野秀俊(書
 生氣質の出版書肆晚成堂の主人、守田勤
 彦、田村成義、實際上の専任理事として活動
 した人は、岡野頭氏で、^私 私が大學卒業前より
 関係してゐる本邸の進文藝社で、^人 人である。あつ
 たら、^其 関係から、私は此會には縁故が深かつ
 た。^{委員} 委員の顔触れで、^女 女らるるであつた。如く、此場
 會は、種々の點に於て、前記二種の劇革新會とは
 異なつたものである。第一に、^其 其極端な寫実主

1020 柏馬園

No.

35

此會の事実上の主腦者は高田、岡倉の二氏
 であらう。二氏は其頃になつては、
 文藝の旨を理解せ。點に於て、明々の群を
 引くものがあつた。内外の文學藝術の
 前多の刷新派の或は國劇の知識を
 或は寫實主義に偏し、一國に精進の様
 態をもち、その浅薄さを同日にして論ずべきに
 ちかあつた。其時、内々未來の大長を
 考へ、その知識が、受生時代には新編を
 さす觀て、雅志、羽衣の母を待たぬを
 點評す。

最負、國劇の半、後の美術院運動を既に
 物中に運きたり、傍ら此方面にも食指頻り
 に動いておれ天心、兩者の意氣、理想は期せ
 あして、~~救合~~、前の二改良會の
 主張の、~~編~~、~~た~~、~~り~~、~~な~~、~~を~~、~~短~~、~~正~~、~~し~~、~~國~~、~~劇~~、~~の~~、~~長~~
 所を保持し、~~一~~、~~時~~、~~刻~~、~~に~~、~~副~~、~~つ~~、~~て~~、~~向~~、~~上~~、~~し~~、~~ま~~
 とい、意見を抱き、毎年一回つ、清海、藝の、~~進~~、~~歩~~、~~を~~
 行ひ、且つ、~~十~~、~~二~~、~~月~~、~~に~~、~~於~~、~~て~~、~~文~~、~~藝~~、~~委~~、~~員~~、~~の~~、~~新~~、~~作~~、~~に~~、~~係~~
 る新劇を上演すとい、會規を作らる。特に新進の
 作家、中より脚本と幕とを、~~一~~、~~事~~、~~を~~、~~し~~、~~て~~、~~兼~~、~~せ~~、~~り~~、~~在~~
 此會の旨

此會の事実上の主腦者は高田、岡倉の二氏
 であらう。二氏は其頃になつては、
 文藝の旨を理解せ。點に於て、明々の群を
 引くものがあつた。内外の文學藝術の
 前多の刷新派の或は國劇の知識を
 或は寫實主義に偏し、一國に精進の様
 態をもち、その浅薄さを同日にして論ずべきに
 ちかあつた。其時、内々未來の大長を
 考へ、その知識が、受生時代には新編を
 さす觀て、雅志、羽衣の母を待たぬを
 點評す。

英訳の
語の外に
西洋史
や

内心の説から判
は、
不得意な英訳書法、其の講座を受持つて其の
準備に忙しく、中筆を執る暇が無いので、一旦は固
く断つたが、會事時とちつて、
勤め文すうもん、
書くと面白いもの、
必しく心が動いたが、尚確答をせよ、
其の四々の芝濱の誰か、
同列れ、
務事、
文藝委員、

の専心

事のは違つてゐるからある。
此頃から狂言作者以外の劇作家があらはれ、
山田美あ、
ての丸、
や、
と廿二年九月初旬、
か、
と、
演習の事を、
君何の書け、
其頃

居士が私の手紙がしてある
 受けよとよまの手續をたして
 送り一旦は **お返し** 一月ほど
 つて 四幕物 **お返し** 二幕
 せよあり、不母でも **あり** 仕上げの
 かの **お返し** 情 **お返し** 集りた
 ので、半幕居士に **お返し** 何おす
 送り、又 **お返し** 申す **お返し** 其
 文雅 **お返し** 春本 **お返し** 大極
 一、 **お返し** 無 **お返し** 執 **お返し** 二
 代 **お返し** 執 **お返し** 二

や今の歌衣五つ **お返し** 何 **お返し**
 其 **お返し** 見 **お返し** 其 **お返し**
 あつた **お返し** 三 **お返し**
 無 **お返し** 又 **お返し**
 此 **お返し** 又 **お返し**
 二 **お返し** 其 **お返し**
 酒 **お返し** 其 **お返し**

と、いふやうな、折角の遺刻抄書也、其
 理志が七転曲立派であつた、係り、それ
 殆ど、いふも、海現され、至らぬ、いふ、
 の、係儀、さき、いふ、だ、いふ、は、
 事、情、も、あつた、が、要する、時、情、が、早か
 り、のである。

十四年十一月下旬

1020 相馬屋藏

七転曲抄書の原本である。其際、
 した二幕、いふ、三幕、大詰の節書、を、
 して、いふ、もので、今は、自、
 とも、いふ、思、い、半、
 と、いふ、を、いふ、
 故、ち、
 の、や、
 の、
 翠、
 作、

1020 相馬屋藏



